

戦後は、生産復興のため石炭産業に重点政策がとられ、三井田川鉱の煙突は香春岳とともに「炭坑節」で全国に歌われる。しかし、昭和

(表2) 市町制までの変遷

明治4年(第22区)	明治20年町村合併	明治22年制行
川原弓削田宮	川宮	弓削田
上弓削田	弓削田	
下弓削田		
見立		
宮尾	奈良	
後藤寺(町)		
鼠ヶ池	糸田	糸田
津・千・東・中・小・下・下8部を103区。	明治37年宮床を糸田村に改称。伊田村は、大正3年1月町制施行。	

(表3) 戸(世帯)数、人口数の変遷

年号	戸数	人口	備考
明治22年	516	3,207	
明治23年	38	4,545	
明治24年	39	2,980	
明治25年	40	3,001	
明治26年	元	3,095	伊田町から
明治27年	9	5,652	8,587人
明治28年	14	5,652	田川市から
明治29年	5	5,059	
明治30年	10	6,772	
明治31年	15	6,690	
明治32年	18	6,351	2月1日町制施行
明治33年	28	20,613	8月1日町制施行
明治34年	34	23,456	8月1日町制施行
明治35年	38	22,563	2月1日町制施行
明治36年	43	20,199	1月1日町制施行
明治37年	48	19,762	1月1日町制施行
明治38年	58	21,377	1月31日町制施行

三〇年代になると、炭坑は石油エネルギーに圧倒されて、次々と閉山していく。現在、田川市街地から北方を見ると香春岳、西方を見ると岡ノ山附近一帯がセメントの採石で削り取られ、無惨な白い岩肌をさらしている。しかし、石炭産業の状況には、はるかに及ばず、田川市の人口も最盛期の六割に減っている。地域維持の努力がなされているが、その災を結んでいないのが現状である。

2、後藤寺地区の炭坑

宮尾村は、田川郡内では比較的早くから石炭採掘が行われている。六角宗文が「狼小物成」の金田手永九力村の「石間歩一覽表」に、貞享三年(一六八六)にその名が出る。石炭採掘に対する藩の統制は、明治維新によって解かれるが、明治六年に「日本坑法」が頒布され、一

この間、明治二年伊田・後藤寺の炭坑を占めて、田川採炭会社が設立されて、後藤寺に本拠を設けた。田川採炭会社は、明治二年設立認可された豊州鉄道との合併を進めるが、当時は炭坑と鉄道の兼営が禁じられていたため、翌二年田川採炭坑と改称して営業する。福岡県下では、三池に次ぐ大炭坑だったといわれる。その田川採炭坑も、内部腐敗によって経営状況が悪化し、明治三二年香春平ら三人に売却して、田川採炭組と称した。しかしそれも、経営方針の足並みがそろわずに行きづまり、明治三三年三井資本に譲渡することになる。

一般の人々の炭業経営ができるようになり、石炭採掘が活発化する。しかし、弱小坑の乱立を招き、明治二二年の小規模炭坑の設置によって、大資本による大規模炭坑への道を開く。田川市域には、弓削田から伊田にまたがる大炭坑が成立する。一方、政府は海軍力増強の燃料対策として、明治二

田川市春日神社の岩戸神楽

香月靖晴

1、後藤寺周辺と田川市の概略

かつて、石炭産業で栄えた筑豊炭田豊前地区の中心田川市は、東に伊田、西に後藤寺と二つの目を持つ街である。これは、田川市が彦山川沿いの伊田町と、中元寺川沿いの後藤寺町が合併したことに起因する。中元寺川流域は、古くから人々が活動し、弓削田から糸田にかけての台地から、縄文時代の石器類や、弥生時代の住居址に土器・石器が見られている。古墳時代は、この地区最大の位置の前方後円墳、見立の円墳、見立狐ヶ池や川宮法光寺裏横穴群などがある。

律令制下も、積極的に開拓が進められていて、条里制の遺構が確認されている。一世紀の「倭名類聚抄」によると、田川郡は、丹波、雄略、位登、城田の四郷があり、後藤寺地区は位登郷に属していた。この豊かな土地は、早くから弓削田荘と荘園化したようである。「豊前志」の著者、渡辺重春(一八三二—一九〇)は、「続日本紀」に宝龜六年(七七五)九月豊前守に任ぜられた、弓削宿禰麻呂にかかわるだろうとしている。

室町時代は、足利・少貳・菊池氏が争い、大内・大友・秋月氏などの戦乱が、天正一五年(一五八七)の豊臣秀吉九州征伐まで続く。

その後、田川郡は毛利勝信(真吉成)、細川小笠原氏と領主が変る。寛永九年(一六三二)小倉城主になった小笠原氏は、細川氏の行政体

(表1) 江戸時代以降の戸口数

年代	元和8年(1622)		弘化4年(1847)		明治17年(1884)		
	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	
河原弓削田	73	161	81	341	92	504	
西弓削田	237	552	上弓削田	73	374	81	439
			下弓削田	81	293	83	442
見立			53	230	65	347	
宮尾			62	311	112	658	
後藤寺			24	122	37	191	
計	416	911	計	374	1,671	470	2,581

明治維新後の行政機構は、大区・小区の変遷があるが、後藤寺地区は、明治二年の市町村制施行によって(表2)のように弓削田村となり、明治四〇年に後藤寺町と改称する。

構を踏襲するが、田川郡の七手永を継ぎ、伊田、金田、上野、後藤、添田の大手永に再編成した。後藤寺地区は、金田手永に属し、「表1」のように変化する。後藤寺町は「正保検地帳」に宮尾弓削田新町の名が出ており、元禄期以前には宮尾弓削田村が宮尾村になっていて、西弓削田村は延享年間にと下に分れ、見立は享保年間とその名が出る。

春日神社の年中最大の祭り神幸祭は、五月中

4、春日神社の神幸祭

神社境内の宮尾祇園社は、「福岡疫病流行ニ際シ」て文明五年（二四八三）、下弓削田祇園社は天明五年（一七八五）に行橋市今井から勧請されている。

月・日	祭り	担当「名」名	御供など	祭りの内容
1. 5	阿弥陀行	西福寺で行う		
1. 7	追儚?	吉丸	餅	
2. 初卯	二月卯御祭	御給主	米	西弓削田浦八山湖井を御供、宮詣、諸祈禱除のため獅子舞
3. 3	春日御祭	二郎丸、太郎丸、釘丸、小堂丸、恒定、中江、小成分（「名」の名なし）	餅、酒	
5. 5		釘丸	米	
6. 晦日	御披露ノ宮神幸	井上、庄原、堂園、両下向(前)直会田中、恒定、御大踏	酒、米、注連お	湖井川に神幸流満馬
7. 7		是正、太郎丸	米、酒、注連お	お通し御神幸、宮詣、流行病退散のため獅子舞
9. 9	御祭	釘丸、太郎丸、恒定、中江、蔵園、両恒弘、両五郎丸、両丸、両犬子、今丸、窪田、吉丸、則宗、門出、両石同、両覚道名、小成分	餅、酒、切米、流満馬	
9. 29	大祭	6月晦日と同じ	6月晦日同じ	28日、神楽29日、産子中社参終日御宮座、12番の相角
11. 辰巳午未		是正、藏丸、龜甲、秋丸	米、酒、米、酒、米、酒	

【表5】 春日神社の祭り内容

わかれていたのを、昭和五二年から伊田の風治八幡宮川渡り神幸祭と、期日を合せて行うようになり、五月中旬に移した。その後、後藤寺側では弓削田莊をしのげせる平安表東の姫道中が始まり、雰囲気をもりあげたが、費用の関係もあって、昭和五八年は中止になった。

以下、神幸祭の日程を、昭和五八年の例で説明する。五月一日（土）午後一時、春日神社

月・日	村・神社名	行事内容
2. 8	上弓削田村	願解に祇園社御祭御祈に福荷社勧請、子供相撲
2. 初卯	西弓削田村	村中安全のため御祈禱獅子舞
2. 被屋中目	下弓削田村	祇園社に大行事事勧請、村中宮詣、子供相撲
3. 2. 3	春日神社	浮殿へ神幸、2日夜岩戸神楽、3日相撲
6. 9	宮尾村・祇園社	病難の願解に村中休日、旗山1本
6. 12	西弓削田村	水取へ神幸、龍見山笠、御披露所で岩戸神楽
2. 13	祇園社	水神社勧請、夏中諸退除生馬安全獅子舞、14日夜通夜、子供相撲
6. 14	原弓削田村	十二祖離現に春日神社勧請、町中安全諸病退除御祈禱獅子舞、旗山1本
6. 16	後藤寺町	貴布祿社に春日神社・水神社勧請、町中休日、旗山1本
6. 18	見立村	貴布祿社に春日神社・水神社勧請、18日夜通夜、子供相撲
6. 19		19日獅子舞御祈禱
8. 8	上弓削田村	2月8日と同じ
8. 被屋中目	下弓削田村	2月被屋中目と同じ
9. 28	春日神社	28日夜岩戸神楽
9. 29		29日西弓削田・宮尾両村祭座

【表6】 天保15年(1844)春日神社氏子園誌「田川郡村々諸祭礼式書上帳」(六角家文書)から。

に奉賛会役員、三一区の区長・神社総代が集って、お波いの儀が行われ、その時、各区から集った山笠や神輿もお波いを受けた。一時四〇分、お波いの神輿に土神風神の舞、両鬼の舞（この舞はお立ち・お着きの神業に舞う）が舞われた後、二時に御神幸が完了した。神輿を乗せた御所車は、奈良の少年野球部一同が引き、春日神社奉賛会の人達が進行を支持。各区の山笠・神輿は、それぞれの区に帰って区内を順行した。

御神幸願路は、春日神社→丸山公園→本町商店街→田川後藤寺駅前→お旅所の板町公民館で、六時頃に到着した。御神幸の途中、適宜に土神風神の舞や花神楽の舞などが、お旅所では

炭坑名	鉱業権者	所在地	備考
炭井	炭井 敏雄	川宮	昭20→昭33閉山
船尾	野上 就業KK	弓削田	昭33閉山
後藤寺江	江田 斗米吉	"	"
藤村	藤村 勝由	見立	昭19→昭33
土井	土井 鉄夫	"	昭21→昭29なし
今任	日豊 就業KK	奈良	昭和29はなし
砂界	有馬 保俊	弓削田	"
見立	大池 早助	"	"
清水	清水 裕治	西木町	昭和23年開坑
杉守	杉守 折吉	見立	昭和29年存在
栄元	嶋田 元六	"	"
関ノ山	原田 正雄	弓削田	"
玄房	広房 正王	見立	"

【表4】 昭和26・29年の中小炭坑（『田川市誌』『田川市史・下巻』から）

三井は、後藤寺に本拠を置いて三井田川炭坑と称し、操場と事務の刷新から始める。その後、三井田川炭坑（後に鉱業所）は発展をとげ、その規模は、戦後を見ても、後藤寺地区に第一坑（本坑）、第二坑（大敷坑）、伊田地区に第三坑（伊田堅坑）、斜坑第六坑、川崎町に第四坑、勾金村（現香春町）に第五坑を有し、筑豊屈指の大炭坑であった。

後藤寺地区には、三井田川炭坑の外に、昭和二〇年代には、「表4」のような中小炭坑があった。明治期にさかのぼると、蔵内次郎作の峠地炭坑、片山逸夫、久良崎寅次郎の小松炭坑、大正期には岩崎久米吉の岩崎後藤寺炭坑、それを受けついで麻生太吉と、筑豊炭坑史に名をはせた人達が活躍した所でもあった。

3、春日神社と弓削田莊

春日神社は、田川市宮尾町六ノ一三（旧後藤寺町大字奈良字井上）にある。周辺に国鉄田川後藤寺駅や西鉄バスセンターがあって、人家が密集し人々が集まる地区の中に、静かで広い地域を保っている。

祭神は、武甕槌命、豊前弓削産産神、布都主命、児屋根命、姫大御神である。

その由緒は、『田川郡誌』巻の一（田川市立図書館蔵）に、「創立神龜五年六月明治六年七月九日郡社ニ被定抑田川郡弓削ノ里ナル春日神社ハ性氏録弓削進左京天神遺孫祖高魂命三世孫天日豐翔矢命ノ後ナリト有リテ豊前弓削産産命ハ僕子御子長白羽命ト共ニ天降リ坐テ御祖高魂産産命天日豐翔矢命布都主命乎弓矢沖ト奉告ル長白羽命神孫世々奉仕リテ鎮坐ス故ニ弓削ノ郷ト言テ後ニ里ノ名ト大御神ノ名ト同称ナル事恐ミテ田ノ一字ヲ加ヘ弓削田村ト申ス神龜雲二年大和国春日里ニ寄奉ル春日ノ大神ト宝龜六年天日豐翔矢命ヨリ三十一世弓削連豊原武甕槌命児屋根命姫大御神乎

勧請シ又弓削田春日神社ト寄寄テ寛政五年再建例奉四月十七日十八日 十月廿八日廿九日 新年祭三月三日」とある。

春日神社は、かつて弓削田莊の領域である、

後藤寺、川原弓削田、上弓削田、下弓削田、見立、宮尾六カ村の惣社であった。弓削田莊成立に、正確な史料の裏付けはないが、鎌倉時代末期のものと思われる九家家文書「撰園家渡領目録」などから、平安末期にけすでに成立していたとされる。当然、藤原氏の氏神、奈良の春日大社の神が莊園鎮守として勧請されたと考えられる。

春日神社の古文書に、元龜二年（一五七二）を最古として、「宮帳」などがある。その記録を「表5」にまとめると、中世では、年中一〇度の祭りを、弓削田莊内の「名」が分担して行った。記載された「名」を、「福岡県史資料」の「明治十五年字小名調」に探すと、見立以外の村に該当するものが多く残っている。また、井上屋敷や常定屋敷などの小字名もあって、「名」と何らかのかかりを持つと思われる。近世になると、宝曆四年（一七五四）の「宮帳」では、年に四度の祭りがあり、「其余ハ不残中絶仕候」となる。これに対し、「表6」に天保一五年（一八四四）の分を見れば、村々が連立して祭りをしている。注目されるのは、六月中旬の祇園祭り、山笠を建てて獅子祈禱、神楽、相撲などの祭礼行事の盛行である。江戸時代の人々は、度重なる飢饉、天災、疫病を防止するため、祇園祭などの神々を勧請し、派手な祭礼を行った。春日

③ 土神風神の舞。五行の中で行うもので、土神が、春夏秋冬、東西南北を司どる木火金水の神に、自分の入る場を要求し、土用の場を認められる話で、約一〇分。

神主姿の風神が、鈴を持って出て小舞を舞った後、両手に御幣を持ちかえて待つ。狩衣、たつけ袴を着、鬼の面をつけた土神が出て、シカン杖（鬼ン棒ともいう）で床を打ち、へんばいを踏む。この両者は、四本柱の所で争い、土神が負けて口上を始める。終ると、風神が三方から赤白緑黒の小幣（みてぐらという）を柱の下に座っている女兒に、それぞれの柱の色に合わせて一本ずつ与え、土神には黄色のみてぐらを渡して退場する。土神はみてぐらを扇で受取って右手に持ち、左手にシカン杖を持って、中央で舞って退場する。最後に、四人の女兒が立ち上がり、小舞を舞って退場する。

④ 花神楽の舞。五行と同じ趣旨の舞で、約一五分。

女兒四人、左手に扇、右手に花吹雪の紙包みを持って出る。舞台を右回りに、一回目は五行と同じである。二回目を同様に戻るが、柱を一区間動く毎に小舞を舞って、最初東に向って一列に並び、「車（くるま）を押し奉る、春の景色と打望（うちぞら）て、東方青し引く標（めし）も青し、只今椿（つばき）ぐる影（かげ）も青し」と歌い、花吹雪を投げあげる。終ると、元の位置に帰って小舞を舞い、次の柱の所に移動し小舞を舞って、南に向って一列に並び、前記歌詞の東を南、青を赤とかえて歌い、花吹雪を投げあげる。同様に西（歌詞の色は白）、北



兩鬼の舞 拝殿内で

（黒）、中央（黄）で繰返す。終ると、小舞・大舞があり、拝礼して退場する。花吹雪の中には、アメなどの菓子も入っているの、子供達が楽しく取り合う場面もある。

⑤ 兩鬼の舞。時間は、一〇分から一五分。千早（錦の上表）、たつけ袴、赤しやぐま赤面の赤鬼がシカン杖を持って出て、へんばいを踏み舞う。約三分後、同様の衣装、白しやぐま黒面の黒鬼が出て舞い、赤鬼と争う。その後、子供を追い回したり、抱きあげたりする。子供が鬼から抱かれると、学校もできるようになり、病気にもかからないという。最後に、「われは、此より直ちに退きて、かくれたる幸を万々歳と守り奉らん祈り奉らん」と唱えて退場する。

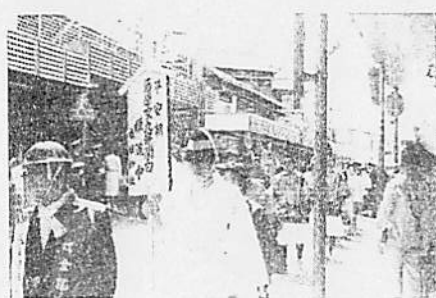
⑥ 兩太刀の舞。白衣・白袴に白しやぐまの一人が、約一〇分。神が自ら修業して、氏子の安全を守ることを意味するといふ。

長い白布を持って入場し、小舞を舞い、前方回転をしながら白布でたすきをかける。拝礼して、三方の上に置いてある長刀とつばがついた短刀をとり、力強く振り回して舞い、兩太刀の先を腹にあてて前方回転をする。続いて小舞を舞い、兩太刀を十字型にして、口にくわえて前方回転をする。次に、首の前で兩太刀を交さし、最後に兩太刀を腹にあてて、それぞれ前方回転して終る。

⑦ 先聖の舞。鯛つりともいい、約一〇分。天孫降臨の前、天忍日命が猿田彦命に、天孫をお迎えする場所を決めさせる話だが、人手不足で全部を演ぜられない。



田川後藤寺駅前て花神楽の舞を舞う少女達



本町商店街から田川後藤寺駅へ向う姫道中
昭和54年5月19日

お首きの神楽が舞われ、祭典が行われて初日が終る。

翌一日（日）は、祭典に続いてお立ちの神楽が舞われて、お上りの御神幸となる。順路は、桜町公民館↓後藤寺バスセンター↓後藤寺商店街↓上弓削田御旅所（昼食）↓下弓削田須佐神社↓川宮若狭神社↓後藤寺バスセンターから三時半頃春日神社に到着した。夜六時から、神社拝殿前に設置された舞台で、岩戸神楽が行われて、一切の行事が終った。

御旅所は、以前は丸山公園、桜町が主であったが、今は順路とともに、役員、区長、神社總代の話し合いで決まる。弓削田、見立地区は二重氏子で、それぞれ神社があり祭りも行われるが、春日神社の御神幸は弓削田までは必ず巡行する。

5、春日神社の岩戸神楽

春日神社の岩戸神楽は、現在五月の神幸祭と一〇月の神待祭に、春日神社神楽保存会によって行われている、今は修技者が少なくなり、神楽の継承に苦心されている、昭和五〇年頃から一部分を小学生女兒の姫舞に切りかえている。姫舞はもと、御神幸の御立ち、御首きの神楽の後に行われていたといわれる。

以下、順番はその時々で多少異なるが、昭和五四年から五八年にかけて行われた岩戸神楽を説明する。場所は、神幸祭御首き神楽は、拝殿前にじゅうたんを敷き、四本の柱を方形に立てて

しめ縄を張り、神待祭では拝殿内で行う。音楽は、笛、太鼓、鉦で、時間は夕方六時に始まり九時頃に終る。

① 清波の舞（米まき）。一人で舞い、時間は約一〇分。

白の着物・袴に白羽織を着て、烏帽子をかぶり、米を乗せた三方を持って出る。その入退場の際に、必ず左足から出して右足をそろえ、次に右足を出して左足をそろえる要領で進む。三方を、正面に設けてある岩戸の前に置き、拝礼して祝詞をあげる。終ると、小舞（右左左右右と舞いながら回る）を右に2回舞い、さらに正面から右左右と舞い、三方から米をとって車側に来てまく。その後、後えりにさしている扇を手にとり、右に2回まわって舞う。以上のことを、南、西、岩戸に向って繰返す。最後は、中央で激しく舞って米を上まき、三方を持って出る。

② 五行の舞。木金火水土の人間生活に必要なものを司どる、東西南北中央の神に感謝する舞といいい、約一五分である。

女兒四人、左手に扇、右手に鈴を持って出る。服装は、袴の袴に白の狩衣である。四人並んで出て、四朝に立ち小舞を舞い、北に向って拝礼して小舞を舞って、一せいに右回りに動く（これを大舞という）。次の柱の所まで移動すると、前と同様に小舞を舞って車に拝礼、小舞を舞って、大舞に移る。以上のことを、南、西、中央で行い、終ると、四人それぞれ柱の側に座り拝礼して待つ。



明治芸能関係記事集 (三)

—「門司新報」所載—

今村元市編

六月九日
●馬廻辨天座の新演劇 馬廻町の新演劇 馬廻町の新演劇にては本日より魁九團山岡如洋一座の改良演劇開演の筈なり

六月十二日
●馬廻の興行たより 馬廻町の新演劇の辨天座に於て去る九日より改良演劇山岡如洋一座乗り込みて非常の入りをおつゝあるが尚ほ唐戸町の娘大力仲之町萬米館の諸芸大よせ唐戸席の浮面等興行ありて執れも繁昌せり

八月九日
●川上音二郎の名譽 在倫敦なる川上音二郎の一行は六月廿七日パッキンガム王宮内に於て演劇を催し英國皇太子殿下の上賓を受尚ほ終演の後特に拜謁をたまひ賞与金として二千円下賜されたれば同一行の大いに面目を施ししとぞ

八月十日
●小倉片信 ▲船頭町常盤座にて目下興行中の歌舞伎一座は過日の末紙に記せし全市堺町古法寺に於ける刃傷事件を芝居に仕組み一昨日と昨日の両日開演せしが全地方にては近頃になき珍事也殊に盆会中商家休業の際なれば大入にて受元は皆を忘れてホク／＼の体

九月十一日
●馬廻辨天座の改良演劇 大阪新演劇協会風の清川一座は過日米馬廻町辨天座に於て興行し毎夜大入をおつゝあり昨日の芸題は前狂言西洋小説譯語偽狂言五幕を演じ大切には嘗て馬廻町川重樓に左様を取りし美代鶴の手練手管を仕組なし恋にもつゝ、乱髪と題して三幕を演じたが爰に其筋書の概略を記るさんに序幕は大阪新町藝妓愛玉の黒形にて愛玉の晶負客なる上村貞造といへるが松本刑事探偵の追跡を避け愛玉の執成にて同家に隠れ居るを松本探偵追跡し来りて屋形に踏込み其意を果たさずして引取るの場にて返へしには壯士俳優松井盛四郎と二三鶴(美代鶴)イチャ／＼の體宜敷といふ場二幕は大阪唐町大字長家の舞台にて口善悪なき婢女等が井戸端会議を催ふし愛玉内二三鶴の艶話に時を移すの場替つて二三鶴の情夫島永太三郎仲居お萬に案内せられて出て来りお萬より二三鶴には俳優の松井といへるノツペリ男に現を抜かず一件を聞き立腹の体宜敷くあつて愛玉の屋形を訪い二三鶴に面談せんとしたる折悪しく二三鶴不在なるの場返へしは二三鶴老母情夫半次郎の廻ら三二階座敷にて島永太三郎に対する根柢を廻らす処へ大船八郎といへるが来り二三鶴半次郎の二人に意見を加へ帰へりし後に島永太三郎来合せ二三鶴老母半次郎と交を催ふし太三郎半次郎の二人千鳥尾にて帰へり行きし後に二三鶴老母の両手相判断にて旧悪胸に切まり来つ

●筑豊の祭り⑦

一人が綱をかくし持ち、南側に正面に向つて座る。薄茶の狩衣、白しやくま、白面の老人が右手に扇、左手のつりざおを杖にして、背を丸めてゆっくりと出る。四本柱の側で小舞を舞い、黒柱から赤柱へと進んで舞つて黒柱の所に移り、つりざおの糸をのばし、綱をつる所作を繰返した後につりあげる。

●折敷の舞。設作折敷の舞といひ、約六分。一人が、米を入れた円い盆を、両手で下から支え、こぼさないように舞う。

●猿田彦の舞。猿田彦命が、天孫を高千穂峯に道案内する時の話で、約一三分。

神主妾の中臣の神が、御幣を両手に持つて出て、小舞を舞う。次によりらくをかぶり女面をつけ、左手に扇右手に鈴を持った天細女命が出て小舞を舞う。その後、面をつけた猿田彦命が、左手に紳右手に扇を持つて舞う。三者の間に、天孫をどこに迎えるかの問答があつて、神主が去る。残つた天細女命と猿田彦命が向い合つて舞い、やがて天細女命が去り、最後に猿田彦命が舞つて退場する。

●岩戸の舞。天の岩戸の神話で、約一〇分。

赤い面、黒しやくまをつけ、千草・たつけ袴の主力男命が、両手に御幣を持つて舞い、へんばいを踏む。黒柱から白柱を経て中央に進み、正面に設置された岩戸を開けようと、力をこめて何度も試みた後、開けることができ、中から光が明るく外を照らす。主力男命が拝礼して終る。

春日神社の岩戸神楽の由来は不明だが、神社



岩戸の舞



猿田彦の舞
左から中臣の神、天細女命、猿田彦命。

福岡県指定文化財・小倉藩大庄屋 「中村平左衛門日記」第2巻刊行!

- ・A5版 477頁 頒価 5,400円
- ・文化14・文政元・同2年の日記を収録、小倉藩農政・農村の実態を知る上で必須の史料である。
- ・第1巻残部僅少 442頁 4,500円
- ・送料 各300円

(申し込み先)

〒803 北九州市小倉北区城内4番1号
北九州市立歴史博物館
☎ 093-571-4466

への寄進を記録した、「豊前田川郡弓削田庄春日大明神宮帳一篇」に、慶安三年(一六五〇)神楽面を採色し、天和三年(一六八三)に神楽殿を建立した記録がある。神楽奉納も宝暦四年には行われ(表5)、天保一五年には「岩戸神楽」(表6)とあつて、現在のものにつながると思はれる。

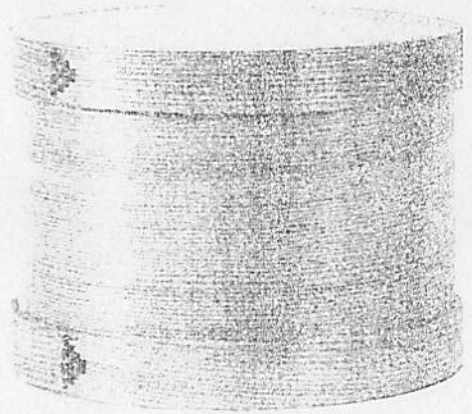
今の神楽は、一〇年近く中断していたのを、昭和四五年頃、保存会を作つて再興したものである。

(かつきやすはる・嘉瀬山郷土研究会)

財団法人 西日本文化協会

会長	九州電力社長	永倉 三郎
専務理事	日本学士院会員	干潟 龍洋
理事	西田瓦斯社長	村上 義一
理事	福岡銀行頭取	和智 午郎
理事	西日本相互銀行会長	山下 敏明
理事	西日本鉄道社長	大村 武彦
理事	福岡相互銀行社長	木本 元敬
理事	元福岡県知事	四島 司
理事	福岡経済連合会常任顧問	杉本 勝次
理事	八幡製糖所副社長	正雄
理事	正金相互銀行専務	大野 豊彦
理事	福岡教育大学学長	山本敬一郎
理事	九州電気工事社長	澤田 龍吉
理事	九州電力常務取締役	開 克敏
理事	九州大学教授	渡邊 哲也
理事	大宰府天満宮宮司	秀村 運三
理事	九州工業大学学長	西高辻信貞
理事	電気ビル相談役	井上 順吉
理事	九州電力会長	今村 寛
理事	福岡県知事	五林 潔
理事	福岡市長	奥田 八二
理事	北九州市長	進藤 一馬
理事	九州大学学長	谷 伍平
理事	新日本製鐵常任顧問	田中 健蔵
理事	北九州商工会議所会頭	水野 巖
理事	西日本鉄道会長	安川 寛
		吉木 弘次

曲げ物



曲物を手にするたびにだれもが、杉板の目目の美しさ、白木の香りのすがすがしさといった素材の持つ肌合いに安らぎを覚え、また、その練られた形の美しさ、素材を生かす技に心引かれことだろう。

博多(鳥居)の曲げ物は宮崎八幡宮社領の中で育ったという特徴を持っている。宮崎宮の氏子であった曲物職人たちは、神に奉納する祭具「ハレ」の器と、桶・柄杓・弁当箱といった様々な庶民の日常「ケ」の器をそこで生みだしていった。ことに「ユリ(百合)」という名で知られるこの大きな曲物は、豪快かつ繊細な美しさを持ち、博多の曲物の代表と呼ぶにふさわしい。一斗(百合)の米が入るところからこう呼ばれ、古くは宮崎宮で用いられた祭具の一種であったらしいが、その後は寿司桶に転用されている。現存する大正末年から昭和三十年頃のユリを見ると桜皮の縫い目に装飾性加わるなど、用途の変化が形態や構造に少しずつ寿司桶としての変化を要求していることがわかる。祭具として洗練されたユリは柔軟に時代の転用を受けとめることで保たれたといえよう。

このような人と物、物と生活の関係は、「カナハチ(飯櫃)」など「ケ」の器が毎日の生活の中で確かめられ、安定感を与える今の形にいたったことにも通じている。

博多の曲物には、実用の美と遊びのゆとりがあり、作る人と使う人の感觸によって受け継がれたその伝統は表現豊かに生き続けている。

表紙写真 「ユリ(百合)」 柴田 玉樹作
 柴田 玉樹作
 杉・桜樹皮 高 11.9 cm 径 49.5 cm
 杉・桜樹皮 高 23.0 cm 径 32.0 cm

ともに福岡市立歴史資料館所蔵
 (写真・福岡県文化会館 文・川浪千鶴)

趣旨

当協会は、昭和三十四年秋に西日本教育芸術協会として発足、主として古典芸能を通じて学校教育に尽力し、昭和三十六年春に財団法人西日本文化協会として新発足した文化団体であります。

文化の進展に伴い、従来の古典芸能のみならず、更に意義ある行事を企画し、学校教育の期待に副うと共に一般社会の要望にも応えたいと念願いたしております。

何卒、この趣旨にご賛同下さいましてご協力とご支援を仰ぎ、当協会の目的達成のために特別のご高配を賜わりますようお願い申し上げます。

事業の概要

- 1 芸能鑑賞
 - イ 古典芸能 能をはじめとし、狂言、文楽、歌舞伎等の古典芸能をとりあげ、とくに無形文化財に指定されたすぐれたものを紹介し、日本古来の伝統芸能の理解、鑑賞につとめる。
 - ロ 一般芸能 新劇、音楽、映画等の一般芸能をとりあげ、その要領に伝える。
 - 2 文化財の公開
 - イ 文化財の現地見学 専門家、学者による文化財の現地見学、講演会を行い、高い見識を培う。
 - ロ 美術展 絵画、彫刻、工芸、その他の文化展を開催する。
 - 3 研究会、講演会
 - イ 学習研究会 講演会、政治、経済、文学、教育等の学術的研究会、講演会を開き、とくに科学的研究態度の根本として文化の健全な発展に寄与する。
 - ロ 教育研究会 講演会、茶道、華道等の文化活動を行ない、日常生活に於ける文化面の開拓を行う。
 - ハ 出版 会誌「西日本文化」の発行、国内外の文献の紹介、復刻、書籍、雑誌のとりつき等を行い、文化活動の原動力を培う。
- その他の達成に必要なと思われる事業を行う。

新加入者(敬称略)

(一般会員)

深田 昭一郎	上 吉 雄
行徳 兼一郎	吉 武 彰
江 光太郎	尾 武 彰
藤 光太郎	川 美 奈子
佐藤 力子	古 松 吉 治

編集委員(五十音順)

今 佐々木 健治	田 中 摩 哲	志 直 海 夫
志 直 海 夫	錦 中 直 夫	秀 織 亮 三
細 川 三 郎	秀 織 亮 三	川 村 三 郎
米 津 三 郎	松 下 志 郎	細 川 三 郎

西日本文化 通巻 192 号
 定価 300円 送料 45円
 振替 福岡 15918
 昭和58年6月2日発行
 発行人 干潟 龍洋
 発行所
 財団法人 西日本文化協会
 〒810 福岡市中央区
 薬院4丁目13番51号
 九州電気科学館4階
 電話(092)531-4538
 印刷 正光印刷株式会社
 福岡市中央区赤坂1-2-21
 電話 (741) 3266